



# 筑紫女学園大学リポジット

現代アメリカ英語における ‘sick to/at/in/on one’ s/the stomach’ について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田口, 純, 田島, 松二, TAGUCHI, Atsushi, TAJIMA, Matsuji メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/566">https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/566</a>

# 現代アメリカ英語における ‘sick to/at/in/on one’s/the stomach’ について

田口 純・田島 松二

## The Expression ‘sick to/at/in/on one’s/the stomach’ in Contemporary American English

Atsushi TAGUCHI and Matsuji TAJIMA

### I

「吐き気がする、気持ちが悪い、むかつく」(= feel nauseated/queasy) の意を表す一般的な形式は、イギリス英語では ‘be/feel sick’ である。ところが、アメリカ英語では、叙述用法の sick は通常「病気の、具合がよくない」(= ill, unwell) の意である。そのためか、「吐き気がする」の意味では、‘be/feel sick to one’s stomach’ がよく使われる。つまり、to one’s stomach という前置詞句が付加された形式である。前置詞は to 以外に at, in, on が用いられることもある。また、前置詞句内では my, his といった所有格 (one’s) のかわりに定冠詞の the が使われることもある。この点までは、内外の大半の辞書、語法書等が指摘するところである。しかし、そのアメリカ英語でも to, at, in, on のうちのどの前置詞が特に好まれるのか、また one’s と the ではどちらがより一般的なのかまでは教えてくれない。歴史的にはいつ頃から使われるようになり、どのような変遷があったのかもわからない。また、イギリス英語では全然見られない表現なのかどうかも不詳である。小論では、大規模な現代英米語コーパスを利用して、その辺りを明らかにしたいと思う。

本調査のために利用した現代アメリカ英語のコーパスは、Brigham Young 大学の Mark Davies 教授が構築した1990年から2015年までの約5億2千万語からなる The Corpus of Contemporary American English (以下、COCA)<sup>1)</sup> である。(このコーパスは現在も構築中であるが、我々の調査は2016年9月の時点によるものである。) 歴史的考察に使用したコーパスは、同じく Mark Davies 教授が構築した1810年から2009年までの約4億語からなる The Corpus of Historical American English (以下、COHA)<sup>2)</sup> である。イギリス英語に関しては、アメリカ英語の COCA と COHA に対応するコーパスは存在しないので、現代イギリス英語については、1980年代から1993年までの約1億語からなる British National Corpus (以下、BNC)<sup>3)</sup> を利用する。ただし、これは上記 Mark Davies 教授が提供するインターフェイス (BYU-BNC) に基づいている。

## II

本論に入る前に、この「吐き気がする、気持ちが悪い、むかつく」の意の ‘sick to/at/in/on one’s /the stomach’ という表現に関する内外の辞書、語法書等の見解を見ておこう。

現今の英米辞書でこの成句を取り上げているものはそれほど多くない。米国系では MWCD (2012<sup>11</sup>)、RHD (1987<sup>2</sup>) くらいであるが、前者は ‘sick to one’s stomach’ だけを収録、後者は at は主に米中部・南部、to は主に米北部・北中部・西部という地域表示も付している。やや古いところでは Web.3 (1961) が前置詞は at, to, in あるいは on が使われる、とし、AHD (1969) は ‘sick at one’s stomach’ も ‘sick to one’s stomach’ も広く使われているが、前者がやや好まれるという。ただし、第2版 (1982) では削除されている。英国系では LDCE (2014<sup>6</sup>) が ‘sick to one’s stomach’ をアメリカ語法 (*AmE*)、OALD (2015<sup>9</sup>) が北米語法 (*NAmE*) と明記し、Macmillan (2007<sup>2</sup>) も ‘sick to one’s stomach’ を収録しているが、特にアメリカ語法といった説明はない。わが国の辞書は大半が見出し語 sick のところで、‘be/feel sick’ (「吐き気がする」) という表現を取り上げ、この意味の場合、《米》では ‘be/feel sick at [to, in] one’s stomach’ を通例用いる、と説明している。その場合、前置詞は at を最初に挙げていることから at が一番使われるという印象を与える。一方、to しか挙げていないものもある (『ウイズダム英和辞典』第3版 (2013) と『プログレッシブ英和辞典』第5版 (2012))。on にふれているのは『研究社新英和大辞典』の第5版 (1980) だけであるが、第6版 (2002) からは消えている。また所有格のかわりに the を挙げているものもある (『研究社新英和大辞典』第6版)。

この表現にふれた語法書は多くない。‘vomiting’ を意味する場合、《英》で sick と言うところを《米》では sick to (or at) one’s stomach と言う、といった類の説明が散見される程度であるが、わざわざ to より at が好まれるとするものもある (Evans & Evans (1957))。アメリカ英語に関して sick to one’s stomach のみを挙げるのはイギリス系の Greenbaum & Whitcut (1988) と Swan (1995)、わが国の小西 (2006) くらいである。to/at/in を全てあげるのはアメリカ系の Perrin (1972<sup>5</sup>) と Wilson (1993)、わが国の福井・北山 (2008) である。Wilson は to はニューイングランドで、at は中西部で主に聞かれるといった地域表示も付している。しかし、one’s の代わりに the を使った sick in the stomach を挙げているのはこの Wilson だけである。on にふれた語法書はないようである。

この成句の歴史に関する手がかりを与えてくれるのは歴史的原理に基づいて編纂された OED2 (1989) と Craigie & Hulbert (1938–44) である。OED2 (s.v. Sick a. and sb. 2.) によれば、そもそも sick が「吐き気がする」の意味で使われるようになったのは17世紀初頭 (初出例は1614年) からであるが、問題の ‘sick at the stomach’ の初出例は1653年、‘sick in one’s stomach’ は1753年、‘sick at one’s stomach’ は1796年、‘sick to one’s stomach’ は1947年である。Craigie & Hulbert の米語辞典 (s.v. Sick, a. 1. b.) では ‘sick at one’s stomach’ の初出例は1653年、2番目の ‘sick to the stomach’ は1830年、3番目の ‘sick at the stomach’ は1872年である。Craigie & Hulbert が挙げる1653年の例をアメリカ英語の例と見なせば、偶然にも大西洋の両側で同時期に出現ということに

なるが、これは2番目の例より約180年前の、英国によるアメリカ植民地建設時代の文書に起こるものであり、今日的な意味でのアメリカ英語の初出例と見なすには問題がある。したがって、この成句の起源はイギリス英語であり、アメリカ英語への登場は1830年以降と考える方が妥当ではなかろうか。詰まるところ、‘sick at the/one’s stomach’ は17世紀中頃、‘sick in one’s stomach’ は18世紀中頃のイギリス英語に、‘sick to the stomach’ は19世紀前半のアメリカ英語に初出、といったところであろうか。ただし、今日最も一般的な形式と目される ‘sick to one’s stomach’ の初出例は20世紀半ばのものである。両辞典の引用例を見ると、歴史的には at が優勢であり、前置詞句内の one’s と the の選択では the もよく使われていたのではないかと推測される。

以上のことをまとめると、‘sick to/at/in/on one’s/the stomach’ という表現は、起源はともかく、今日ではアメリカ英語に特有の成句であり、前置詞の選択に関しては、辞書からは at が、語法書からは to が一般的であるという印象を受ける。in や on は頻度が低そうである。前置詞句内では所有格 (one’s) が一般的で、the の使用は稀ということのようである。では、現代のアメリカ英語では、そしてイギリス英語ではどうなのか。またアメリカ英語における歴史的な変遷はみられるのか、といった点を以下で見えていきたいと思う。

### III

アメリカ英語に特有の表現と考えられる ‘sick to/at/in/on one’s/the stomach’ であるが、前置詞は to, at, in, on のうちどれが一般的なのか、前置詞句内では所有格と定冠詞のうちどちらがより好まれるのか。そしてこの成句はイギリス英語にも見られるのか。現代英米語の状況を観察する前に、まず歴史的な変遷を見てみよう。

#### 3.1 歴史的に見た ‘sick to/at/in/on one’s/the stomach’

Mark Davies 教授が構築したアメリカ英語の歴史的コーパス COHA (1810–2009) を使用して、1810年以降の歴史的変遷を見てみよう。このコーパスは10年単位で検索データを提供してくれる。次表で10年毎の前置詞用例数を示すが、( ) 内は所有格 (one’s) ではなくて、the をとる形式の用例数である。

表1：COHA における ‘sick to/at/in/on one’s/the stomach’

	1810–	1820–	1830–	1840–	1850–	1860–	1870–	1880–	1890–	1900–
to	0	0	1(1)	0	1(0)	0	0	3(1)	1(0)	1(0)
at	0	0	1(0)	0	2(2)	3(2)	3(2)	1(1)	1(1)	3(1)
in	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
on	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Total	0	0	2(1)	0	3(2)	3(2)	3(2)	4(2)	2(1)	4(1)

	1910-	1920-	1930-	1940-	1950-	1960-	1970-	1980-	1990-	2000-
to	4(0)	2(0)	6(0)	16(3)	14(0)	16(0)	29(1)	17(2)	33(0)	39(0)
at	6(2)	8(4)	6(1)	9(4)	8(2)	7(1)	4(0)	3(0)	2(0)	0
in	0	0	2(0)	1(1)	0	2(0)	0	0	0	0
on	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Total	10(2)	10(4)	14(1)	26(8)	22(2)	25(1)	33(1)	20(2)	35(0)	39(0)

上表のデータをグラフで示すと次のようになる。

図 1

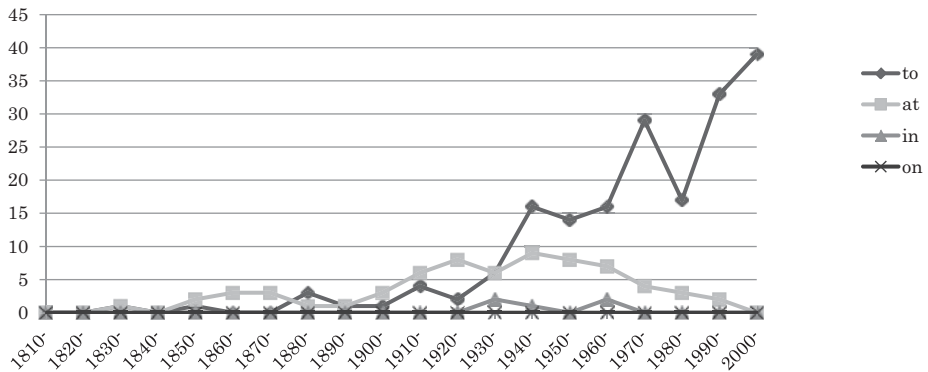


表1と図1によれば、toとatは1830年代から見られるが、1930年代までは用例数自体が少ないので、どちらが優勢であるとも言いがたい。1940年代以降はtoが優勢になり、atは減少の一途をたどる。そして70年代以降はtoが一般的になり、2000年代には唯一の形式となる。inは1930年代から60年代にかけてごく稀に見られるが、onは皆無である。

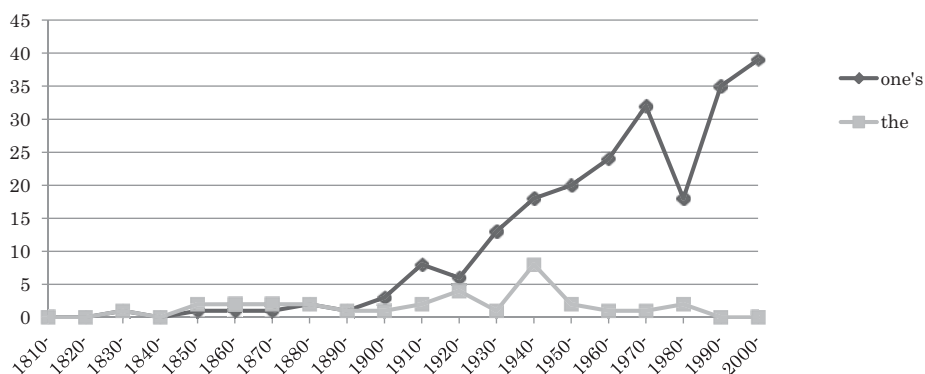
次に、sickに後続する前置詞句 (to/at/in/on one's/the stomach) 内の one's と the の生起状況はどうか。上の表1で ( ) 内に示したものを、改めて表とグラフで示すと次のようになる。

表 2 : COHA における one's と the

	1810-	1820-	1830-	1840-	1850-	1860-	1870-	1880-	1890-	1900-
one's	0	0	1	0	1	1	1	2	1	3
the	0	0	1	0	2	2	2	2	1	1
Total	0	0	2	0	3	3	3	4	2	4

	1910-	1920-	1930-	1940-	1950-	1960-	1970-	1980-	1990-	2000-
one's	8	6	13	18	20	24	32	18	35	39
the	2	4	1	8	2	1	1	2	0	0
Total	10	10	14	26	22	25	33	20	35	39

図 2



前置詞句内の one's と the の選択に関しては、上の表と図から明らかなように、用例こそ少ないものの当初から両方が用いられていたことが分かる。1920年代まではどちらが優勢とも言いがたいが、30年代以降は one's が優勢になり、50年代以降一般化し、90年代以降は唯一の形式となる。以下に、COHA に見られる最も早い、1830年代の2例と1850年代からの1例を挙げるが、前置詞は to と at、前置詞句内は the と one's である。いずれもアメリカ英語に起こる最も初期の例と言えるものである。中でも3番目の例は、*Uncle Tom's Cabin* で有名な Stowe 夫人 (1811–96) の作品 *Dred: A Tale of the Great Dismal Swamp* (1856) に起こるもので、今日最も一般的な形式と目される 'sick to one's stomach' の初出例ということになる。(以下、引用文中の下線は筆者らのものである。)

Rum, if they take tu [sic] much of it, makes folks sick to the stomach -- so do the newspapers. (1833 FIC: LifeWritingsMajor)

He never laughs heartily like a man, but always in a half-sniffing sort of manner that actually makes me sick at my stomach. (1834 FIC: GuyRiversATale)

"Laws, massa, dat ar smoke an't good for missis," said Tiff. "She done been sick to her stomach all day." (1856 FIC: DredATaleGreat)

歴史的にみれば、アメリカ英語では、'sick to one's/the stomach' も 'sick at one's/the stomach' も19世紀の前半、1830年代から見られる。'sick at one's/the stomach' は1930年代までは比較的によく見られるが、1940年代以降は 'sick to one's stomach' が優勢になり、一般化する。2000年前後には唯一の形式といっても過言ではない状況である。one's と the では、1900年代以降 one's が優勢になり、50年代以降一般化する。2000年前後の状況はこの COHA のデータからも明らかであるが、もっと規模の大きい現代アメリカ英語コーパス COCA (1990–2015) における生起状況を見てみよう。

### 3.2 現代アメリカ英語における ‘sick to/at/in/on one’s/the stomach’

約5億2千万語からなる現代アメリカ英語のコーパス COCA には、問題の ‘sick to/at/in/on one’s/the stomach’ が合計375例見られる。約1億語からなるイギリス英語のコーパス BNC には15例確認できる。100万語あたりの頻度で見ると、COCA が 0.702、BNC が 0.156である。アメリカ英語ではイギリス英語の4.5倍の頻度で用いられていることになる。とはいえ、アメリカ英語特有の表現と見られる ‘sick to/at/in/on one’s/the stomach’ がイギリス英語にも散見されることは注目してよい。

両コーパスにおける前置詞別の用例数は以下の通りである。用例数の後の（ ）内に示す数字は the の内訳である。

表3：COCA と BNC における ‘sick to/at/in/on one’s/the stomach’

	to	at	in	on	Total
COCA	348(2) (92.8%)	15(1) (4.0%)	9(4) (2.4%)	3(0) (0.8%)	375(7) (100%)
BNC	12(1) (80.0%)	0(0) (0%)	3(1) (20.0%)	0(0) (0%)	15(2) (100%)

上表に見られるように、‘sick to/at/in one’s/the stomach’ における前置詞の生起状況は、COCA では to が全375例中348、と9割以上を占め、at, in, on はごく稀である。BNC でも用例数は少ないが、to が全15例中12、と8割を占める。in が3例見られるが、at と on は皆無である。英米共に to が一般的な用法であることは明らかである。

では、‘sick to/at/in/on one’s/the stomach’ という成句の前置詞句内における代名詞の所有格と定冠詞 the の分布状況はどうか。アメリカ英語の COCA では全375例中368 (98.1%) が所有格であり、the は極めて例外的である。ただし、前置詞 in の場合、用例数は少ないが両者はほぼ拮抗している。イギリス英語の BNC でも全15例中13 (86.7%) が所有格であり、the は稀である。英米共に所有格が支配的な用法である。

前置詞 to の選択においても、所有格の選択においても、COCA の結果は先に見た COHA の2000年前後の状況とほぼ一致している。

以下に、COCA と BNC から得られた用例を前置詞別に、所有格と冠詞を伴う例をそれぞれ1例ずつ示す。

#### <COCA の用例>

‘sick to one’s stomach’: I closed my eyes and felt sick to my stomach, so I slid down the wall and sat on the floor. (2015 FIC: Run you down)

‘sick to the stomach’: Years ago when he had been a boy, Tair had struggled to hide his reaction to his father’s sometimes violent and unpredictable outbursts, though such displays of unbridled fury had left him sick to the stomach. (2009 FIC: Desert prince, defiant virgin)

‘**sick at one’s stomach**’ : I felt sick at my stomach again as I rubbed my tingling ears. (2015 FIC: Dark places)

‘**sick at the stomach**’ : When her mother reminds Mary that it is time to get ready for school, she tells her that she is sick at the stomach. (1993 ACAD: Education)

‘**sick in one’s stomach**’ : But she got sick in her stomach when she pictured herself doing the same thing. (2013 FIC: Literary Review)

‘**sick in the stomach**’ : He became warmer, stopped shivering, didn’t feel so sick in the stomach, slipped in and out of sleep. (2002 FIC: Confrontation)

‘**sick on one’s stomach**’ : “I was a little sick on my stomach in the race,” he said. (2002 NEWS: Washington Post)

‘**sick on the stomach**’ : No examples found.

#### <BNC の用例>

‘**sick to one’s stomach**’ : I felt sick to my stomach reading that filth. (1993 W\_fict\_prose: The ladykiller)

‘**sick to the stomach**’ : Many were so appalling that even Himmler had been known to walk out of the showings, sick to the stomach. (1991 W\_fict\_prose: The eagle has flown)

‘**sick at one’s stomach**’ : No examples found.

‘**sick at the stomach**’ : No examples found.

‘**sick in one’s stomach**’ : Robinson feels sick in his stomach. (1992 W\_pop\_lore: Esquire)

‘**sick in the stomach**’ : As she collected up the plates and covers herself and went without Miss Vine’s twelve p, the face of Timothy Gedge appeared in her mind, causing her to feel sick in the stomach. (1987 W\_fict\_prose: The Children of Dymmouth)

‘**sick on one’s stomach**’ : No examples found.

‘**sick on the stomach**’ : No examples found.

## IV

以上、「吐き気がする、気持ちが悪い、むかつく」の意を表す ‘sick to/at/in/on one’s/the stomach’ という成句表現に関して、アメリカ英語を中心に、英米語の大規模コーパスを利用してその実態を見てきたが、次の3点に要約できるように思われる。

1. 文献上は17世紀中頃のイギリス英語に初出、アメリカ英語には19世紀前半の1830年代に登場す



るが、今日では主としてアメリカ英語に特有の表現であることは間違いない。しかし、イギリス英語でも稀に使われる。

2. 前置詞は米英共に圧倒的に to である。アメリカ英語では at, in, on もごく稀に見られるが、at, on はイギリス英語には全く起こらない。
3. sick に後続する前置詞句内の所有格 one's と定冠詞 the の選択では、所有格が規則的であり、the は例外的である。

以上のことから、現代アメリカ英語では、そして稀にしか見られないイギリス英語でも、‘sick to one's stomach’ が最も一般的な表現形式であり、他の ‘sick at/in/on one's/the stomach’ は極めて例外的な形式であると言えるのではないだろうか。（ついでながら、‘sick to one's stomach’ の初出例は、OED2 のものより 1 世紀早い、1856 年のものであることも付記しておきたい。）わが国の幾つかの辞書、語法書等が与える ‘sick at/to/in one's/the stomach’ という表示の仕方は多少修正の必要があるのではないか。

## 注

- 1) COCA (<http://corpus.byu.edu/coca/>) は、1990 年から現在に至るまで、毎年、5 つのジャンル (Spoken, Fiction, Popular Magazines, Newspapers, Academic Journals) から 400 万語ずつ、合計 2 千万語を収録したもので、現在、5 億 2 千万語余のコーパスである。
- 2) COHA (<http://corpus.byu.edu/coha/>) は、COCA にほぼ準拠して構築された 1810 年から 2009 年に及ぶ約 4 億語のコーパスである。Fiction, Magazine, Newspaper, Non-fiction の 4 つのジャンルからなる。
- 3) BNC (<http://corpus.byu.edu/bnc/>) は 1980 年代から 1993 年に及ぶ約 1 億語からなるイギリス英語のコーパスである。Spoken, Fiction, Magazine, Newspaper, Non-academic, Academic, Miscellaneous の 7 つのジャンルからなる。

## 参考文献 (小論で言及したもののみ)

- AHD = *The American Heritage Dictionary of the English Language*. 1st ed. (1969), 2nd college ed. (1982). Boston: Houghton Mifflin.
- Craigie & Hulbert (1938-44) = Craigie, W. A. and J. R. Hulbert (eds.). *A Dictionary of American English on historical principles*. Chicago: University of Chicago Press, 1938-44.
- Evans & Evans (1957) = Evans, Bergen and Cornelia Evans. *A Dictionary of Contemporary American Usage*. New York: Random House, 1957.
- Greenbaum & Whitcut (1988) = Greenbaum, Sidney and Janet Whitcut. *Longman Guide to English Usage*. Harlow, Essex: Longman, 1988.
- LDCE (2014<sup>6</sup>) = *Longman Dictionary of Contemporary English*. 6th ed. London: Longman, 2014.
- Macmillan (2007<sup>7</sup>) = *Macmillan English Dictionary*. 2nd ed. Oxford: Macmillan Education, 2007.
- MWCD (2012<sup>11</sup>) = *Merriam-Webster's Collegiate Dictionary*. 11th ed. Springfield, MA: Merriam-Webster, 2012.
- OALD (2015<sup>9</sup>) = *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*. 9th ed. London: Oxford

University Press, 2015.  
OED2 (1989) = *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. Oxford: Oxford University Press, 1989.  
Perrin (1972<sup>3</sup>)= Perrin, Porter G. and Ebbitt R. Wilma. *Writer's Guide and Index to English*. 5th ed. Glenview, ILL: Scott, Foresman, 1972.  
RHD (1987<sup>2</sup>) = *The Random House Dictionary of the English Language*. 2nd ed. New York: Random House, 1987.  
Swan (1995)= Swan, Michael. *Practical English Usage*. 3rd ed. Oxford: Oxford University Press, 2005.  
Web.3 (1961) = *Webster's Third New International Dictionary of the English Language*. Springfield, MA: Merriam, 1961.  
Wilson (1993) = Wilson, K. G. *The Columbia Guide to Standard American English*. New York: Columbia University Press, 1993.

『ウィズダム英和辞典』三省堂、2013<sup>3</sup>.  
小西 (2006) = 小西友七編『現代英語語法辞典』三省堂、2006.  
『研究社新英和大辞典』研究社、1980<sup>5</sup>, 2002<sup>6</sup>.  
福井・北山 (2008) = 福井慶一郎・北山長貴編著『最新英語語法辞典』朝日出版社、2008.  
『プログレッシブ英和中辞典』小学館、2012<sup>5</sup>.

(たぐち あつし：英語メディア学科教授)  
(たじま まつじ：九州大学名誉教授)